

令和 4 年 9 月 9 日現在

機関番号：32401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02900

研究課題名(和文)現代中国語における可能表現の学習効果 導入及び習得データに基づく実証分析

研究課題名(英文)On the Learning Effects of Possible Expressions in Modern Chinese-An Empirical Analysis based on Introduction and Data Acquisition

研究代表者

安本 真弓 (Yasumoto, Mayumi)

跡見学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：40533576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国語可能表現の習得状況のさらなる向上を目指して、第二言語習得理論に基づいた、学生に理解されやすい指導要領(「理解可能なインプット」)を考案した。

考案に先立ち、2年間にわたり日本国内の計24大学において、教員に対しては中国語可能表現の教室指導に関するアンケート調査を、学生に対してはその習得状況に関する測定テストを実施した。そこで得られたデータを基に、初歩的な「理解可能なインプット」を開発した。さらに、その「理解可能なインプット」に関する小規模的な検証作業を行った後、より完成度の高い、文脈付き「理解可能なインプット」(改良版)をデザインした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：本研究では、これまでの学説とは異なる中国語可能表現に関する理論的枠組み(安本2009)を応用して、教室指導の観点から指導要領(「理解可能なインプット」)をデザインした。これによりこれまでの教室指導において曖昧であった中国語可能表現の各形式の意味と用法を一定程度明確に分けることができたと考えられる。

社会的意義：本研究で開発された文脈付き中国語可能表現指導要領を中国語教育の現場で応用することにより、教員にとっては中国語可能表現の各形式の違いをこれまで以上に容易に説明できるようになり、学生にとってはそれをより一層理解しやすくなり、負担なく習得できるようになったと考える。

研究成果の概要(英文)：In order to improve the acquisition of possible expressions in Chinese, this study used the second language acquisition theory to design a teaching plan that is easy for students to understand.

Before designing this teaching plan, we first spent two years in twenty four universities in Japan to conduct a questionnaire survey on how to use Chinese to express class instructions for teachers, on how to construct appropriate examination papers to test the students' acquisition of knowledge. Based on the survey results, we developed an initial "comprehensible input". Then after conducting a verification of this "comprehensible input", a more complete and context-driven "Comprehensible Input" (improved version). was designed.

研究分野：中国語学、日中対照言語学、中国教育学

キーワード：中国語可能表現 助動詞可能表現 補語可能表現 教室指導 理解可能なインプット 教員アンケート調査 学生測定テスト

1. 研究開始当初の背景

中国語の可能表現(助動詞可能形式と補語可能形式とに大別する)については、これまでに各表現形式の意味構造、使用上の差異に関して論じる理論的研究が数多く行われてきた。そのなかで、たとえば助動詞可能形式に関しては「心理的動き」を表し、補語可能形式に関しては「状態性が強い」といった指摘がなされてきた。ただし、これらはいずれも教学面において応用するには抽象的であり、教育効果が期待できるものであるとは言い難い。また、助動詞可能形式は肯定時に多用され、否定時では補語可能形式が多く使用されるといった使用上の差異を指摘する研究もあるが、これを教室指導で応用する際、なぜそのなかで取り上げられる例文を用いて両者の使用上の違いを解説できるのか、教員が十分に理解できず、結果的に曖昧な解説しかできないことで、日本語母語話者の学習者による各可能形式の乱用を引き起こしている。これらはどれも一部の言語事実のみを捉え、構築された学説や教授法に過ぎないため、学習者向けの解説としては適していないと考えられる。近年になって教科書の導入事例(文法解説、用例など)を用いた実証的な研究が行われるようになってきているものの、教学面において効果的な指導ができるような成果はいまなお見られていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現在日本で使用される各種中国語教科書のなかで扱われる中国語可能表現に関する導入事例を収集、分類したうえで、日本語母語話者が効果的に学習できる教授法を提示することにある。具体的には、まず教室指導における各種中国語可能表現の導入時期、初級導入時の例文、導入順序などについて、どのような教授法が実際に用いられているのかを教員アンケートで調査し、集計、分析する。あわせて、その教授法による学習効果を追跡するために、学習者がどの程度まで中国語可能表現を習得できているのかを学生測定テストで調査、分析する。そのうえで、安本(2009)などで再構築された新たな理論的枠組み(曖昧であった中国語可能表現の解釈を意味的・認知的観点から再分析したもの)に基づく教授法、すなわち「理解可能なインプット(comprehensible input)」を開発し、それを導入した学習効果をアンケート調査によって得られたデータをもとに検証する。また、中国語可能表現の習得において母語となる日本語が如何なるメカニズムで干渉しているかについても分析したうえで、第二言語習得の指導向上に寄与しうる知見を得ることが本研究におけるねらいである。

3. 研究の方法

1)中国語可能表現に関する現行の中国語教科書による教授法を把握し、教学上において問題となり得る点を洗い出すために、そのなかで記述されている解説、用例ならびに指導内容や中国語可能表現が用いられるコンテキストといったデータを抽出、入力、整理、加工し、分析に耐えうる一定規模のデータベースを作成した。2年目にはそのデータベースのさらなる拡充を図った。

2)中国語可能表現の現行教授法による指導効果を調査するために、無記名式の教員アンケートを作成した。なお、調査2年目は記入する内容がより回答しやすくなるように改良版を作成した。2年間にわたる調査活動のなかで、北海道から九州までの計24大学、累計34名(うち、2名が重複)の教員に対してアンケート調査を実施した。

3) 中国語可能表現の現行教授法による学習効果を習熟度別に調査するために、無記名式の学生測定テスト2種類(「助動詞のみ」と「助動詞と補語」)を作成した。なお、本研究では期間が3年と限られていたため、一度に多くのデータを収集する「横断的研究」を採用した。データ収集の2年目では設問がより見やすくなるように測定テストのレイアウトを微調整した。2年間にわたったこの調査では、北海道から九州までの計24大学で、助動詞可能を既習した学習者を対象とした「助動詞のみ」測定テストを累計1033名(計44クラス)の大学生に対して、助動詞可能と補語可能を既習した学習者を対象とした「助動詞と補語」測定テストを累計909名(計44クラス)の大学生に対して実施することができた。

4) 上記の分析・調査結果をもとに、あわせて第二言語習得理論ならびに安本(2009)などの理論的枠組みを援用しつつ、学習者にとって「理解可能なインプット」(パイロット版)すなわち中国語可能表現の教授法を開発した。なお、本研究では「理解可能なインプット」を再定義しなおしているため、第二言語習得理論のなかで定義されているものとは異なる。

5) 指導ならびに学習効果を検証するために、本研究代表者と分担者の本務校においてそれぞれが担当する中国語クラスで上記の「パイロット版」を試験的に導入した。その検証結果を踏まえ、「改良版」となるコンテキスト付きの中国語可能表現「理解可能なインプット」を設計した。最終的には他大学の教員の協力を得ながら「改良版」を幅広く検証しさらなる改良を加える予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により(多くの大学が約2年間にわたり遠隔授業を実施した)この検証作業は実施できなかった。

4. 研究成果

本研究における主な成果として、従来の中国語可能表現教授法にはさまざまな問題点があることを踏まえたうえで、教員にはより指導がしやすく、学生にはより習得がしやすくなるように、新たなコンテキスト付き「理解可能なインプット」を開発したことが挙げられる。また、社会に幅広く発信するために、本研究で得られた知見をまとめて学会やシンポジウムで口頭発表を行い、そこで指摘を受けた点やアドバイスなどに基づき発表内容にさらなる修正を加えたうえで、最終的に下記7編の論文にまとめ上げた。

論文1)「漢字から読み解く「可能」の意味 中国語の“能”を中心に」(掲載済)。要旨: もともと「熊」に似た動物を指していた中国語の“能”が、後の意味拡張を経て、才能あるいは能力を持つ人 から 才能あるいは能力を持つ、ある事柄をする能力 を表すようになり、最終的に「可能義」(可能助動詞)を獲得した過程を、文献史料を手がかりに詳細な分析と記述を行い、明らかにした。先行研究では可能助動詞“能”に対して多様な語義や解釈を与えているが、これらに通底する基本義として、可能助動詞“能”には「ある事柄ができるか否か」という意味が存在していること、また実際の使用場面ごとに「内的条件」、「外的条件」といった制約を考慮しつつ、話し手の認知的経験値に基づきある判断を下しているのが“能”の文中における役割であることを指摘したうえで、可能助動詞“能”の構文義が話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する であるといった結論を導き出した。

論文2)「中国語可能表現のメカニズム “能”と“会”構文を中心に」(掲載済)。要旨: 中国語可能表現のメカニズムについて、可能助動詞“能”と“会”を中心に、認知意味論からのアプローチによる分析と考察を行い、以下の点を明らかにした。可能助動詞“能”の意味的特徴は「動的」、「臨時的」であるのに対し、“会”は「静的」、「恒常的」とな

る。可能助動詞“能”が使われる文の構文義は「話し手が『主語が様々な状況下においてある種の動作や行為を行うことができる』とした判断を行う」であるのに対し、“会”は「話し手が『主語が常態下においてある種の動作や行為を行うことができる(だろう)』とした推測を行う」となる。この結果を踏まえ、第二言語習得の観点から可能を表す“能”と“会”の構文に関する指導法の提案も行った。

論文3)「中国語可能表現の習得状況に関する考察 大学における調査結果を中心に」(掲載済)。要旨: 学習者が中国語可能表現に関する誤用を引き起こす要因について、「現行インプット」と4つの誤用タイプ(a.「母語転移による誤用」、b.「目標言語の文法規則からの転移による誤用」、c.「学習ストラテジーによる誤用」、d.「指導内容によって誘発される誤用」)を踏まえつつ、大学における中国語学習者の可能表現習得状況「測定テスト」の調査結果とデータ分析をもとに考察を行った。その結果、今後導入すべき「理解可能なインプット」を含め、以下の知見を得た。可能助動詞“能”、“会”、“可以”がすべて使用できる出題文、または“能”と“会”がいずれも使用できる文において、それぞれ正答率が非常に低かった。その主な要因がdタイプであることを踏まえると、今後導入すべきコンテキストと用例はどう提示し、どう文法解説をしたらよいか、検討する必要がある。助動詞“能”または“会”のみが使用できる文でも誤用が非常に多かった。この要因は4つの誤用タイプのすべてに関わってくるのが考えられる。可能助動詞“能”と“会”の相違点についても、学習者がより理解しやすい形で、その文法説明と用例提示をする必要があると思われる。正答として可能助動詞を選択するのか、あるいは可能補語を選択するのかを問う出題文でも正答率が極めて低かった。この主な要因としてはaとdタイプが挙げられるため、可能助動詞と可能補語の用法の違いや使い分けに関する説明も、できるだけわかりやすく記述する必要がある。可能補語に関する設問でも正答率が極めて低かった。この主な要因もaとdタイプが挙げられる。また、学習者の母語となる日本語の干渉も大きな影響を与えている可能性が十分考えられるため、この点も考慮した導入方法を検討する必要がある。中国語学習歴の長さと同可能表現の習得レベルとの間に相関関係が認められなかった。従って、学習者の中国語可能表現運用能力を向上、定着させるべく、学習指導内容が継続的なものとなるよう工夫する必要がある。

論文4)「中国語可能表現に関する指導法試案と実践検証」(掲載済)。要旨: 第二言語習得理論をもとに、大学生を対象に実施した中国語可能表現習得状況の測定テスト結果を踏まえ、従来の研究成果を反映した「現行インプット」による指導内容の問題点を指摘したうえで、安本(2009)などの理論的枠組みを取り入れた「理解可能なインプット」による中国語可能表現指導法(試案)を考案した。本試案の特徴ならびに要点は、以下の通りである。可能助動詞“能”と“会”がいずれも使える例文を提示する。可能助動詞“能”と“会”が表す可能表現について、それぞれの使用条件を説明し、意味の違いがどこにあるのかを解説する。可能補語形式がどういった場面や状況で用いられるかを提示する。可能補語形式と助動詞可能形式が表す「可能」とはいったい何か、両者にどのようなニュアンスの違いがあるのかを説明する。それぞれの可能補語形式が、話し手の「心的態度」や「事柄に対する知覚・感情」などの部分で、どういったニュアンスを表しているのか、またどのような使い分けがあるのかを解説する。さらに、本試案を用いた教室指導の実践結果を振り返りながら、今後の課題と改善点についても言及した。

論文5)「可能助動詞“会”“能”“可以”に関する『理解可能なインプット』作成の試み 教員アンケート結果を踏まえて」(掲載済)。要旨: 2017年12月から2019年2月まで

の期間に計 2 回実施した中国語可能表現の教室指導に関する教員アンケート（中国語教育に従事する大学教員、計 24 大学、累計 34 名（うち、2 名が重複）を対象に実施したアンケート調査）をもとに、その集計結果から浮き彫りとなった（「現行インプット」を含む）様々な問題点を分析したうえで、中国語学習者の視点から考案した、可能助動詞“会”、“能”、“可以”の教室指導に関する新たな「理解可能なインプット（教案）」を提示した。ここでは、論文 3~4 で得られた知見ならびに研究成果を踏まえ、可能助動詞“可以”に関する用法解説も盛り込んだものとなっている。

論文 6）「日本の大学における中国語可能補語教室指導の一考察」（掲載済）。**要旨**：日本の大学で中国語を学習する大学生を対象に実施した「中国語可能表現習得状況測定テスト」と中国語授業を担当されている大学教員を対象に実施した「中国語可能表現の教授法等に関するアンケート調査」の集計結果から見えてきた、「現行インプット」による問題点を指摘したうえで、安本(2009)などの理論的枠組みを取り入れた、「理解可能なインプット」に基づく「コンテキスト付き中国語可能補語指導法」を提案した。ここでは、論文 3~5 などで得られた知見を踏まえつつ、「2018 年度試作版」に大幅な修正を加える形で、新たな教授法モデルを提示した。本教授法の特徴は、主に以下の点にある。学習内容の定着率をより一層向上させるために、可能補語を段階的に導入している。可能補語表現が実際に使用されている場面や状況がいったいどういったものなのか、日本語母語話者である学習者がそれをできるだけ正確に理解、把握できるようコンテキスト（文脈）を提示している。教員が可能補語を段階的に指導しやすいように、3つのステップを設定している。

論文 7）「汉语可能表达式的“可理解输入”——以日本大学课堂讲解为例」（投稿済、査読中）。**要旨**：日本の大学で中国語を学習する大学生を対象に実施した「中国語可能表現習得状況測定テスト」と中国語授業を担当されている大学教員を対象に実施した「中国語可能表現の教授法等に関するアンケート調査」の集計結果を踏まえつつ、第二言語習得理論によるアプローチから、可能助動詞“能”、“会”、“可以”ならびに可能補語に関する新たな指導法（教授法モデル）を考案した。ここでは、論文 3~6 を概観したうえで、中国語学習者の視点から考案した、「理解可能なインプット」に基づく中国語可能表現指導法を、教案事例とともに示している。

今後の展望としては、主に次の 2 点が挙げられる。

1) 3 年の研究期間をかけて開発した中国語可能表現のコンテキスト付き「理解可能なインプット」については、本研究代表者と分担者が担当するクラスで「パイロット版」を用いた検証をすることはできたものの、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により他大学教員の協力を得ての大規模な検証作業を実施するには至らなかった。今後は可能な限りその検証を行い本研究によって開発された「理解可能なインプット」を改良していく予定である。

2) 「理解可能なインプット」における指導要領では、助動詞可能形式と補語可能形式に対してそれぞれの構文義を付与し、普遍性を持たせたため、日本国内の中国語学習者のみならず、他の国と地域の中国語学習者にも本研究で開発した教授法が適用できるものと考えられる。したがって、この「理解可能なインプット」を取り入れたテキスト（英語版を含む）を作成し、中国語可能表現に関する教室指導の質向上に寄与していきたい。

【参考文献】

安本真弓(2009)『現代中国語における可能表現の意味分析 可能補語を中心に』、白帝社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 安本 真弓・吉田 泰謙	4. 巻 第55号
2. 論文標題 「可能助動詞”会””能””可以”に関する「理解可能なインプット」作成の試みー教員アンケート結果を踏まえてー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『跡見学園女子大学文学部紀要』	6. 最初と最後の頁 145-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安本 真弓・吉田 泰謙	4. 巻 第6号
2. 論文標題 「日本の大学における中国語可能補語教室指導の一考察」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『御殿山語用論研究論集』	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安本 真弓	4. 巻 第54号
2. 論文標題 「中国語可能表現のメカニズム “能” と “会” 構文を中心に 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『跡見学園女子大学文学部紀要』	6. 最初と最後の頁 95 - 109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田 泰謙・安本 真弓	4. 巻 第108号
2. 論文標題 「中国語可能表現の習得状況に関する考察 大学における調査結果を中心に 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西外国語大学『研究論集』	6. 最初と最後の頁 151 - 168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安本 真弓・吉田 泰謙	4. 巻 第5号
2. 論文標題 「中国語可能表現に関する指導法試案と実践検証」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西外国語大学『御殿山語用論研究論集』	6. 最初と最後の頁 21 - 40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 安本 真弓	4. 巻 第16号
2. 論文標題 漢字から読み解く「可能」の意味 中国語の“能”を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学『人文学フォーラム』	6. 最初と最後の頁 46 - 62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 0件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 安本 真弓・吉田 泰謙
2. 発表標題 「中国語可能補語を見る 教学的立場から」
3. 学会等名 日中対照言語学会第43回大会(Zoomによるオンライン開催)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安本 真弓・吉田 泰謙
2. 発表標題 「中国語可能表現に関する指導法試案と実践検証」
3. 学会等名 法国中文研究与教学学会2019年学术研讨会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安本 真弓
2. 発表標題 如何看待漢語的表可能句式--从与日語相比較的角度
3. 学会等名 第十屆現代漢語語法國際研討会（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安本 真弓・吉田 泰謙
2. 発表標題 對外漢語教學中的表可能句式之教學方法探討 - 以可能助動詞“會”“能”“可以”為例
3. 学会等名 第三屆對外漢語教學語法國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安本 真弓・吉田 泰謙
2. 発表標題 「日本の大学における中国語可能補語 - 教室指導の一考察 - 」
3. 学会等名 第6回御殿山語用論研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安本 真弓・吉田 泰謙
2. 発表標題 中国語可能助動詞の教室指導と問題点について 教員アンケート結果を踏まえて
3. 学会等名 第6回「IRI言語・文化フォーラム」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安本 真弓・吉田 泰謙
2. 発表標題 漢語表可能句式的二語習得情況之分析
3. 学会等名 The 26th Annual Conference of International Association of Chinese Linguistics(IACL), University of Wisconsin-Madison, Madison, Wisconsin, USA (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安本 真弓・吉田 泰謙
2. 発表標題 漢語表可能的兩大句式之二語教學分析
3. 学会等名 第二十次現代漢語語法學術討論會(中國社會科學院語言研究所主辦)(國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安本 真弓・吉田 泰謙
2. 発表標題 「 中国語可能表現に関する指導法の試案 教室での実践例から 」
3. 学会等名 第5回御殿山語用論研究会(関西外国語大学国際文化研究所・IRI共同研究プロジェクト研究会主催)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田泰謙、安本真弓
2. 発表標題 中国語可能表現の習得・指導状況に関する考察 大学における調査結果を中心に
3. 学会等名 第4回IRI言語・文化研究フォーラム(関西外国語大学国際文化研究所主催)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安本 真弓
2. 発表標題 助動詞“会”和“能”的語義分析
3. 学会等名 現代漢語語法前沿論壇; (中国・上海復旦大学中文系主催) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安本 真弓
2. 発表標題 可能表現のメカニズム “能”と“会”を中心に
3. 学会等名 日本中国語学会2017年度関東支部第3回例会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	吉田 泰謙 (Yoshida Hiroaki) (70468982)	関西外国語大学・英語国際学部・教授 (34418)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------